

目次

第五章

景色を回遊する 8

基底から中世文学の薫り漂う「光悦蒔絵」の世界
伝本阿弥光悦作 樵夫蒔絵硯箱 10

「仁清黒」、轆轤の名手ならではの薄造り、斬新な意匠
色絵金銀菱文重茶碗 22

桃山の流行最先端
織部四方手鉢 34

太鼓橋に松林Ⅱ「住吉」
山本春正作 住吉蒔絵平棗 46

ブランド化された希少なやきもの
尾形乾山作 色絵立葵文透鉢 58

洒落心溢れる京焼の優品
色絵 栄花物語冊子形硯箱 70

番付表にも載る染付香合の代表的作品
古染付叭々鳥香合 82

愛らしい美濃焼の香合と、塗り重ねに歴史を感じる堆朱香合
黄瀬戸宝珠香合 堆朱屈輪文香合 94

臓器のような花のような、「生命感」があふれる
黒田辰秋作 金鎌倉五稜茶器 106

「浪花の三名物」屈指の名品
紅葉呉器茶碗 118

第六章 ゆきぶられる 132

「坊主の姿でいるけれど、中は宇宙で遊んでいるよ」
一休宗純筆 初祖菩提達磨大師 134

もとは茶碗ではなかった、松平不昧愛蔵の大名物
割高台茶碗 長束割高台 146

「作家性の否定」の対極に立つ意欲作
鈴木藏作 志埜水指 158

「今後これほどのものはできぬ」と織部に言わしめた
古伊賀水指 銘破袋 170

第七章 零れ伝わる声 184

切られ、破れ、伝説となった
虚堂智愚筆 法語(破れ虚堂) 186

後世の手本となった古筆切
伝小野道風筆 継色紙 198

西行の真筆と伝わる貴重な書
西行筆 一品経和歌懐紙 210

「歪ませない」のが黄瀬戸の特徴
黄瀬戸立鼓花入 222

「備前焼中興の祖」の指跡残る平水指
金重陶陽作 備前緋襷平水指 234

利休と三斎の交流、絆を感じ取る
千利休作 茶杓 銘 ゆがみ 246

第八章 侘びを感じる 256

丁寧に作られた「穏やかな」一碗
大井戸茶碗 有楽井戸 258

数多の茶人に愛された、「柿の蒂」随一の名碗
柿の蒂茶碗 銘 毘沙門堂 270

侘びの美観により見出された渡来品
南蛮水指 銘 芋頭 282

世界を一新させた「黒」の力
長次郎作 黒樂茶碗 銘 面影 294

あとがき 310

美術館案内 312

初出一覧 317

掲載作品一覧 318

- 本書対談記事は主に取材当時の情報を掲載しています。
- 対談者略歴は2022年10月現在の情報を反映しています。
- 本企画は、日本文学研究者である著者の研究活動の一環として、特別な許可のもと取材撮影、観覧の機会を得ています。作品に直に触れ、新規撮影する機会が設けられることは一般的でないことをご了承ください。